HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	博覧会の記憶 : 1904年セントルイス博覧会とアイヌ
Author(s)	宮武, 公夫
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 118, 45-93
Issue Date	2006-02-28
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34109
Type	bulletin (article)
File Information	118_P45-93.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 118 (2006)

博覧会の記憶
―― 1904年セントルイス博覧会とアイヌ ――

宮 武 公 夫

序　章

一九〇四年の四月六日午後，セントルイスのユニオン・ステーションに，九名の風変わりな一団が到着したことが，翌日の新聞に大きな写真入りで報じられた。四人の豊かな髭をたくわえた男性と，三人の女性，それに二人の幼い女児からなる一行は，セントルイス世界博覧会・人類学部門書記官のハルバートに出迎えられた。北海道の沙流川地域に古くから住む人々を中心にしたこのアイヌの一行は，セントルイスで開催される世界博覧会の人類学展示に参加するために，近代以降に日本から初めて海外に渡航したと確認できるアイヌの人々だった。沙流川流域のアイヌ社会から，初めて米国の大都市を訪れた人々も，セントルイス到着時には，伝統的な服装ではなく，渡航前に立ち寄った東京で学校を訪問する際，一ヶ月の前払い金を使って購入したと思われる和服に身を包んでいた。(Starr 1904; 89)そして，北海道で宣教を行うバチェラーのもとで働いた経験を持つ二人のアイヌ青年は，ジャケットにズボンという洋服を身につけていた。これらのアイヌの一行について新聞は，九人のメンバーのうち，老人の一人を除く全員がキリスト教徒であると伝えていた。(St.Louis Post-Dispatch, April 7, 1904)

一九〇四年に米国のセントルイスで開催されたルイジアナ割譲記念セントルイス博覧会には，この新聞記事のように，アイヌの夫婦，幼い子供，若者

が参加し，数ヶ月の間，北海道からはるばる運ばれた二棟のチセの中で生活し，儀礼を行い，工芸品を作って観客に販売した。その博覧会は，ほとんどの西洋人や，和人である日本人が，初めてアイヌの人々と出逢った場所であったと同時に，参加したアイヌの人々にとっても，見知らぬ社会や人々との日常的な接触を初めて経験する機会だった。(注１)

このような博覧会における先住民の展示，あるいは参加には，さまざまな批判が寄せられてきた。(注２) それは，これらの博覧会の開催が，先住民社会を近代国家が包摂し，破壊し，強制的に同化しつつあった植民地主義の時代と同期していたことを，大きな理由にしている。その時代には，世界中のさまざまな人間とその社会を，生物と同じように，未開から文明への進化の過程として説明しようとする，社会進化論が全盛期を迎えていた。それは，「科学」の名のもとに，世界各地のさまざまな人々や社会を，「人種」や「文化」の優劣によって，「未開」から西欧を頂点とした「文明」への進歩の過程として理解し，説明しようとする，誤解と偏見にとらわれたものだった。そして，世界各地の博覧会への先住民の参加や，人類学展示をはじめとする「人間の展示」には，生まれたばかりの新しい学問である，世界各地の種族や習俗を研究するための，人類学や民族学，好奇心に満ちた研究者たちが関係してきた。

このような背景から，人類学展示やアイヌの博覧会への参加は，植民地主義や，誤った人種イデオロギーによる非人道的な出来事として語られてきた。さらに，博覧会でのアイヌの展示は，差別を可視化する権力装置だとするフーコー的権力論による，文化の政治学や，社会進化論に基づいて，西洋社会を頂点とするヒエラルキーを正当化する植民地主義的展示であると理解することが一般的である。このように，植民地主義が頂点に達しようとする時期に開かれた，産業社会の祝祭としての博覧会については，数多くの批判的研究が行われてきた。しかしその一方で，博覧会に参加し，展示された先住民の具体的な姿については，言葉をもたない被隷属者や「歴史なき人々」として，人々の記憶から消し去られてきた事も事実である。

しかし，各地の博覧会におけるアイヌをはじめとする世界各地の先住民は，植民地主義的な支配権力によって政治的，経済的，文化的に包摂され，あるいは社会の周縁へと排除され，そのなかでモノと同じように扱われ，博覧会で好奇の目に晒され展示されるだけの存在だったわけではない。自然と文化が共存する神話的社会から，科学技術と文明の中心都市で開催される博覧会場へはじめて移動したひとびとは，そこで数ヶ月のあいだ集団生活をおこない，観客として訪れた西洋人や他の「日本人」，各地の先住民との多様な異文化接触を初めて体験した，当時としては非常に希な存在だったといえるだろう。それらの人々は，母国では「未開」の少数者として排除され差別される存在でありながら，「文明」と権力の中心都市へと移動することで，それまで経験したことない人々との交流や，科学技術のあふれる都市社会との接触を経験した。そのなかでも，アイヌの人々は，強大な権力によって展示された存在であったと同時に，様々な背景のもとで博覧会に参加することを自ら選択し，そこで生活し，さまざまな実践を行った人々でもあった。言い換えれば，支配的文化に呑み込まれるだけの，あるいは文化変容を余儀なくされる無力な少数者や，権力に従属する被隷属者ではなく，博覧会という巨大な装置に自ら入り込み，多くの人々との多義的で複雑な接触体験を通して，多くの可能性を生み出んだ，キメラのように多彩な貌を持つ人々でもあった。

さまざまな先住民を「文明社会」の中心都市に運び「展示」した博覧会の実態は，産業資本主義と植民地支配を国家を挙げて祝う祝祭であったと同時に，伝統社会において行われてきた見世物や余興の形を変えた再生産でもあり，その時空間は，先住民と西洋人あるいは日本人という異質の歴史や社会や文化を持った人々が出会い，直接の接触と相互交流が繰り広げられた接触領域だったといえるだろう。（宮武　二〇〇五，Clifford 1997，栗本・井野瀬一九九九）その時空間では，人々が権力関係に規定される一方で，従来の価値や秩序を塗り替えるような新たな要素を生み出す，複雑で多様な接触反応が起こっていたといえる。それは言い換えれば，支配的なイデオロギーや概念を超える可能性をはらんだ，ひとつのパーフォーマティブな時空間であり，

発話行為を生み出す状況だったといっても良いだろう。また，その国家や文化を超えた混交的な時空間は，展示側と被展示側，観察者と被観察者，語る側と語られる側など，さまざまな領域が複雑に交錯して，それぞれ固有の歴史や文化が混じり合って，新たな語りを生み出すような十字路を形成していた。(アング　二〇〇二)その十字路は同時に，複雑な対立や葛藤のなかで生み出される，新たな自己成型(self-fashioning)の時空間でもあった。グリーンブラットは『ルネサンスの自己成型』のなかで，芸術作品はアイデンティティが試され，挑戦され，解体され，再構成される坩堝としての実験室であると，つぎのように述べている。

「この(文芸作品の)実験室で私が観察したものは，演技として生きられた生の勝ち誇った肯定だけではなかった。それどころか，……それは矛盾と葛藤の中と喪失の脅威に引き裂かれているように見えてきた。こういった裂け目は，自己成型の否定的な限界をではなく，それが存在することの根本条件をなしているように，私には思われた。そして，自分が同時にまた，ルネサンスの後も生き延びて，今日に至るまでヨーロッパとアメリカにおいて模範となってきたアイデンティティの様式を成立させている条件を探し求めているのだ，と私は感じた。」(グリーンブラット　一九九二；Ⅶ)

二〇世紀初頭までの博覧会は，勝ち誇った人種理論や植民地主義によるまなざしや，言説や，プロパガンダなどの表象によってのみ説明可能なものでも，固定された一般理論や，包括的な解釈を与えるものでもない。単純な植民地主義・人種主義イデオロギー論や権力論は，二十世紀初頭の博覧会における，アイヌをはじめとするヒトの展示をモノの展示と等価にしてその「非人間性」を批判する一方で，アイヌや先住民がモノと等価にされたとすることで，ヒトとヒト，ヒトとモノの接触領域において解体され，再構成され，創造された一切の可能性，アイデンティティ，新たな概念や言葉，関係のありかたを明らかにする実践の歴史を奪ってきた。優れたフェミニズム研究者であるダナ・ハラウェイによれば，隷属性そのものが存在論の根拠になるこ

とはない。非文脈的で「客観的」な知の対象としての隷属性など存在せず，もし存在するとすれば，知の対象自体が知る者にとっての素材にされているからなのだ。(Haraway 1988; 592) 本稿で博覧会におけるアイヌの展示を取りあげるのは，セントルイス博覧会が，「近代」への過渡期にあって，差別と同一性の葛藤と喪失の裂け目のなかから生み出され，今日に至るまで生き延び，様々なネットワークとアイデンティティを生み出す可能性を学んだ行為の「実験室」であったと考えるためである。その「実験室」とは，多くの社会を，国民国家や民族という個別で特殊な文化領域と，科学に代表される自然の領域へと純化し再配置する「近代」への過渡期において，異なった人々が固有性を維持しながらも，異質な存在のあいだの翻訳と混交を可能とするネットワークを生み出す「実験室」でもあった。しかし，「近代社会」は，このような博覧会という「実験室」の増殖を放置するはずはなかった。筆者が先に明らかにしたように，セントルイス博覧会からわずか六年後に開催された日英博覧会では，アイヌの人々は「日本人」として同化される一方で，和人と区別された他者として排除されるという，ダブルバインドの状態におかれていた。そこでは，独自の文化やアイデンティティは見世物として非文脈化され，同時に人々との交流や接触は制限され，ヒトやモノのあいだのネットワークの形成は否定されていた。(宮武　二〇〇〇，Latour 1987, 1993)

本稿では，各地に残された現時点で収集可能な博覧会資料と，残されたモノや限られた記憶をとおして，博覧会に関する一応 (prima facie)「真」であると考えられる歴史記述を行うことを目指している。(北田　二〇〇一)それは先に述べたように，知の対象を知る者にとっての素材におとしめる，素朴な客観主義や演繹的な「歴史主義」，あるいは，言語により過去が構築されるという「ポストモダン歴史学」による言説の暴力性を否定することであり，「近代」の仮説によらない，人類学的歴史研究における，状況に据えられた知と認識のあり方とも通底するからである。(ポパー　一九六一，Haraway 1988，ギンズブルグ　一九九〇，春日　二〇〇四)

第一章　米国の博覧会と先住民展示

本章では，セントルイス博覧会に大きな影響を与えたとされる，一八九三年のシカゴ万国博覧会について述べる。コロンブス新大陸到達四〇〇年記念として開催されたシカゴ博覧会は，ミシガン湖畔の六八五エーカーの広大な敷地に，十二ヶ国のパビリオンをはじめとする七十七の建築物が建設され，五月から十月の期間中に二七五〇万人もの観客が訪れた。(Benedikt 1983) この博覧会の建設責任者であった，シカゴの建築家バーナムをはじめとする代表的建築家による主要な建築物は，白一色の華麗な新古典派建築様式によって統一されていたので，本会場はホワイトシティと呼ばれることになった。また，ホワイトシティには，フランス，ドイツ，ノルウェー，スペイン，カナダ，イギリスをはじめとする西欧諸国の外国館が点在していたが，そのなかには，平等院鳳凰堂を模した日本館が異彩を放っていた。

これらの展示とは別に，シカゴ博覧会は本格的な先住民展示が行われた米国で最初の例として知られる。この博覧会では，三つの異なった領域での先住民の展示が行われてた。第一に，ホワイトシティ南東の角には，芸術宮や林業館なども手がけたシカゴの建築家チャールズ・アトウッドによって設計された，縦四一五フィート横二二五フィートという大きな人類学館が八万八千ドルをかけて建てられた。(Bolotin & amp; Laing 2002, 44) その内部には，考古学や民族学関係だけでなく，慈善矯正局と，健康衛生局の展示が含まれていた。(Truman 1893, 255) 一八九一年二月に，この民族学部門 (Deapartment of Ethnology) の展示責任者に任命されたのが，ハーバード大学のアメリカ考古学・民俗学教授を努めていたプットナム (Frederick Ward Putnum) だった。マサチューセッツ州セーレムの名家に生まれたプットナムは，ハーバード大学で考古学や歴史学の科学的研究手法を学んだあと，ピーボディ科学協会初代所長のほか，米国民俗学会会長などの要職を勤めていた。(Truman 1893, 261-262) そしてプットナムは，スミソニアン協会や民族局が，民俗資料や先史時代の考古資料を，未開から文明へという非科学

的な進化論的図式をもとに展示しようとしたのに対して，歴史的文脈やそれぞれの地理的条件によって分類された科学的・体系的展示の正当性を主張して対抗した。プットナムが関係したピーボディ博物館は一八九七年にハーバード大学の一部となったが，ハーバードでのプットナムはアメリカ先住民の学生や，多数の女性研究者を初めて積極的に採用した。そして，北米各地に建設された博物館の展示企画や，若い人類学者の教育と指導に中心的な役割を果たすことになる。(Browman 2002; 508-519) このようなプットナムが企画した，シカゴ博覧会の人類学館では，「人類とその業績」と題された，アメリカ・インディアンや南太平洋の民族資料や考古学資料の展示が行われ，コロンブス記念博覧会にふさわしくコルテスのメキシコ征服時の模型なども含まれていた。また人類学館の外には，大きなユカタンの遺跡が再現されていたほか，イロコイ・インディアンやペノブスコット・インディアンなどの数棟のアメリカ先住民の住居が展示されていた。これらの展示は，科学の一分野として発展しつつあった人類学の研究と教育の成果を示すための展示として，他の先住民展示とは区別された人類学展示と呼ぶことができるだろう。この展示では，のちに米国の文化人類学を主導するフランツ・ボアズも形質人類学部門の展示に関わっていた。(Appelbaum 1980: 95, Patterson 2001; 48)

このような人類学展示のほかに，先住民の展示が行われていた場所として，チュニス，アルジェ，トンキンなどの植民地の住居が屋外に再現された，フランス館の付属施設が挙げられる。これらの展示は小規模であったが，フランス植民地領内における先住民のすがたと，フランスによる統治の成果と現状を示していた点で，植民地展示とよぶことができるだろう。

しかし，シカゴ博覧会で非西欧世界の人々を見ることができたのは，これらのホワイトシティ内の展示だけではなかった。ホワイトシティの西側約一マイルのジャクソン公園とワシントン公園をつなぐ地域には，全長約一マイルの細長い大通りからなる，ミッドウェイ・プレザンスと呼ばれる大規模な娯楽ゾーンが設けられた。その中央には，フェリス・ホイールと呼ばれる，直径七五メートルもの世界初の巨大な電動式大観覧車が設けられ話題を呼ん

だ。そしてフェリス・ホイールの東西に伸びる道路の両側には，世界各地の娯楽館が建てられていたが，そこでは各国の芸人がさまざまな余興を演じ，工芸品を販売し，各地方の飲食物を供して人々を楽しませた。(Truman 1893; 549-589)

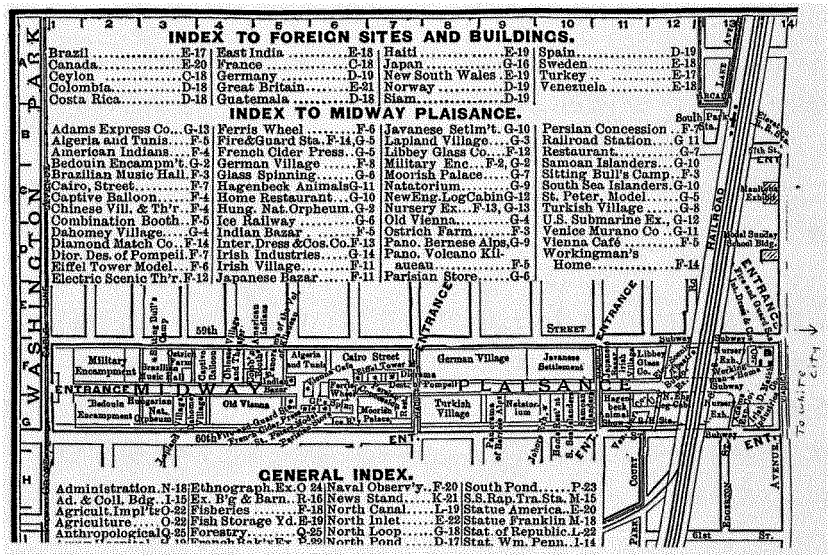
このミッドウェイ・プレザンスについて，多くの研究者は社会進化論を反映した展示装置であるとしている。「ミッドウェイに点在した『集落』は，個々の属する社会がホワイト・シティを頂点とする『進歩』の階梯のなかで占める位置に従ってヒエラルキー的に配置されていた」。(吉見　一九九二；一九三) これは博覧会研究者ライデルが引用する，現代文芸批評家デントン・スナイダーが一八九三年と一八九五年に書いたとされる記述に依拠している。それによれば，ミッドウェイは人間性(humanity)の計算尺であり，(「文明」の中心である) ホワイト・シティーに最も近い部分には，ゲルマン系やケルト系の人種がおかれ，中心部にはイスラム世界，西アジア，東アジアが位置していた。そして西へ下るとダホメのアフリカ人と北米インディアンへと辿り着くが，それらはプレザンスの対極に相応しい位置に置かれていた。(Rydell 1984; 64-66) これらの「人間の生きた見本」を理解するには，進化の順に見物していくことが必要で，「ミッドウェイを東方向に進み，ホワイト・シティへと至る道程は，そのまま闇の世界から光の世界に向けて上昇する『進歩』の歴史と同一視されていたのである。」(吉見　一九九二；一九四)

しかしミッドウェイ・プレザンスがホワイト・シティから区別された直線の街路として作られ，その中に世界各地の村落などを点在させていた点で，民族学的意義を持っていたにしても，その具体的な配置から図式的な人種進化のヒエラルキーを理解するのは困難だろう。展示配置図をみると，「未開」とされるダホメの村落やアメリカ・インディアンが，ホワイト・シティから離れた場所に位置していることは事実だ。しかし，ブラジルの音楽ホールやハンガリーの国立オルフェウム劇場が，これらの「未開」の展示からさらに離れたところに位置している。またペルシャの売店や，アルジェリアとチュニスの展示，カイロの街路，トルコ村は中央部に置かれているが，それらは全て大きなスペースを占める古のウイーン(old Vienna)展示よりホワイト・

シティに近い位置に置かれていたのだ。それだけではない。ホワイト・シティーに近い部分には，大きなドイツ村が位置していたが，それはトルコ村と向き合う位置にあった。さらにホワイトシティーに向かってジャワ人居住地やサモア島人の展示が並び，さらに先には，日本売店，アイルランド村が並んでいた。(Appelbaum 1980，大井　一九九三；十一－十二)このように，具体的なミッドウェイ・プレザンスの配置は，文明社会と未開社会，未開人種と文明人といった，「進化の順」を見物したり，非西欧から西欧へといたる，「闇の世界から光の世界に向けて上昇する『進歩』」を体験できる「人間性の計算尺」などではない。ヘーゲル主義者として知られるデントン・スナイダーが，弁証法的な進化の歴史を配置から読みとったとしても，一般の観客にとって「未開」と「文明」が混在した「進歩の歴史」の弁証法を理解することが可能だったとは考えられない。(Dye 1968; 153-167) ミッドウェイ・プレザンスの配置は，通りの中央に置かれた世界初の巨大な観覧車（Ferris wheel）を中心にして，その周辺に人々の関心の高い「オリエント」や古いヨーロッパの展示を配置し，その外側の離れた地区には集客力のない展示をランダムに配置したと考えるべきだろう。「確かにミッドウェイ・プレザンスは商業主義と人種主義を表している。しかし，かなりの批評家たちが言うように，ミッドウェイをそうした関係からのみ理解することは，純粋な娯楽と，少なからぬ教育的意義について見失わせてしまう。」(Muccigrosso 1993; 164-165) ミッドウェイに点在した集落が，「進歩」の階梯のなかで「ヒエラルキー的に配置されていた」と考えるのは，植民地主義のまなざしによって一切の非西欧社会の展示が配置されたと考え，演繹的に対象を進化主義・植民地的なものとして理解しようとする「迷信」であり，誤った歴史主義にすぎない。(ポパー　一九六一，Gross & Levitt 1994) むしろ，このようなミッドウェイ・プレザンスは，「人類とその成果」を展示し教育するために人類学者によって企画された人類学館や，植民地統治の正当性を啓蒙する植民地展示とは異なり，非文脈的な余興や見世物と，非西欧世界への素朴な好奇心が混在していたというべきだろう。(注６)

シカゴ博覧会における非西洋のヒトとモノの展示は，普遍的なヒトに関す

る科学である人類学の啓蒙と宣伝のための人類学展示，植民地統治の成果と現状を，植民地内の住居展示によって示した植民地展示，それにミッドウェイ・プレザンスでの余興や見世物としての展示が，それぞれ異なった展示空間において実現されていた。このように，近代科学の成果としての人類学展示，非近代との連続性を持った余興や見世物，そして帝国主義の成果と課題を示すための植民地展示という，三つの異なった性格を持った展示が博覧会場で混在していたのは，近代社会が成立する過渡期に，普遍的な学としての人類学を含む科学の領域と，個別的で特殊な国民国家を基礎にした文化の領域が分化する過程で，非近代の残滓が見世物や余興として混在する状況を反映していたと理解すべきだろう。(宮武　二〇〇〇)



ミットウェイ・プレザンスの配置図。向って右側がホワイト・シティとなっている。(Appelbaum 1980)

第二章　セントルイス世界博覧会

シカゴ博覧会と同じように，一九〇四年にセントルイスで行われたルイジアナ割譲記念万国博覧会（Louisiana Purchase International Exposition）は，典型的な米国の博覧会といえるものだった。日清戦争，ボーア戦争，米西戦争などの直後に開催されたセントルイス博覧会は，米国や日本といった新興帝国主義国家が，その軍事的勝利を記念し，展示物や，新聞や，雑誌や，映画などを通して，その輝かしい勝利と軍事的，経済的成果を世界中の人々に示すという，歴史的結節点として重要な意味をもっていた。（Benedict 1983）

当時，全米で四番目の人口を誇る大都市であり，シカゴと並ぶ中西部の中心都市であったセントルイスにおける博覧会は，四月三〇日から一二月一日までの約七ヶ月間開催され，開催期間中には二千万人近くもの観客を集めた。この博覧会では，これまでの博覧会中最大の約一二〇〇エーカーという広大な敷地に，教育，芸術，科学といった，「文明」の成果に関する一六の展示をはじめ，農業，工業，漁業などの「自然」に関連する部門の展示が所狭しと並べられた。そして展示館の最後には，人間研究の人類学，共同体の富を考える社会経済学，そして健全な精神と倫理に不可欠とされた身体文化の展示が加わった。このように世界博覧会は，文明と自然，そして人間の身体と文化を展示する，「人類とその業績に関する，巨大な人類学と民族学の博物館」となった。（Rydell 1984: 159-160）

この博覧会には，世界中のさまざまな展示物が集められただけでなく，マックス・ウエーバーやアンリ・ポアンカレといった国際的に著名な学者も参加する，一連の国際会議が開催され，博覧会の学術的意義が強調された。（Rydell 1984: 155）その講演者の中には，のちに米国の人類学界で指導的地位を担うことになる，フランツ・ボアズも含まれていた。（Boas 1974: 23-36）さらに日本人講演者としては，芸術と科学会議で講演した岡倉覚三（天心）が参加している。前年に英国で『東洋の理想』を出版し，ボストン美術館顧問となっ

たばかりの岡倉は，セントルイスでの講演でアジアにおける唯一の芸術の擁護者として日本を語った。それは，急速に台頭しつつある帝国主義国家としての日本が，中国に代わる極東の文化的盟主としての存在を世界に誇示するために，博覧会という巨大な展示装置を通してその存在を世界に発信した瞬間だった。(Christ 2000)また訪問者の中には，在米中の北里柴三郎や片山潜といった，著名な日本の細菌学者や社会主義者なども含まれていた。(St. Louis Public Library, newspaper scrapbook, Vol.12)

このセントルイス博覧会に，日本は一九〇〇年のパリ万博に次ぐ八〇万円もの予算を計上して参加した。(Hotta-Lister 1999，伊藤　二〇〇三)日本にとってのセントルイス博覧会は，初期の博覧会での，西欧文化とは異質のアジアの新興国家として文化を紹介するという啓蒙的段階を終え，日露戦争開戦を理由に参加を取りやめたロシアとは対照的に，その軍事的・経済的成功を積極的に世界にアピールする場となった。(伊藤　二〇〇三)そのため，日本の博覧会への資金的，人的参加努力は，諸外国をはるかにしのいでいた。この博覧会に外国から参加した二一カ国中，日本は日露戦争中にもかかわらず大きな予算をかけて綿密な準備を行い，博覧会開会日までに二四以上もの展示を間に合わせた唯一の国となった。(注３）そして日本は，一五万平方フィートという広い敷地内に，産業，生産，教育，交通，芸術，鉱物，そして農業に関する宮殿(palace)を建設したほか，日本庭園や，金閣寺と日光東照宮が日本から呼び寄せた大工などによって日本そのままの技法で再現され，その巧みな東洋の職人技術が，開催前から新聞などを通して米国人の大きな関心を呼んだ。会場の茶室では，芸者による茶道の実演が行われ，日本を紹介する本や写真，物産品などの販売が行われた。また劇場では芸者による歌舞が演じられたほか，歌舞伎の蜘蛛の縮直噺を題材にした，「蜘蛛の劇」(The Spider Play）の公演がおこなわれ人気を呼んだ。(Reid 1904）さらに特筆されるのは，日露戦争の最中に日本赤十字社の展示が行われていたことだった。それは，日本が西欧と比肩する軍事力を持った近代国家になっただけでなく，国家間の戦闘においても，先進国と同様のルールに則った国際的

医療制度を持つ，「文明化」された国民国家の象徴となっていた。(Harris 1975) そのように，近代国家日本と米国社会を，経済，政治，社会，文化的に強く結びつける機会となった博覧会に，アイヌの人々と，チセ（アイヌ住居）を始めとする生活や儀礼のための資材が，はるばる太平洋を渡って北海道からセントルイスに運ばれた。(Starr 1904)

第三章　先住民展示と人類学者

万国博覧会におけるアイヌ民族資料の展示は，一八七三年（明治六年）のウイーン万国博覧会に遡ることができる。(佐々木　一九九七a，一九九七b，三浦　二〇〇一) また，万国博覧会にアイヌの人々を参加させようという計画は，一八七六年のフィラデルフィア博覧会についての資料に見られる。一八七二年に北海道開拓使に招かれ，鉱物資源の調査や地質図の作成などを行っていた米国の地質学者ライマンは，一八七五年一二月の黒田北海道開拓使長官に宛てた手紙で，二・三人のアイヌなら大きな経済的負担はなく，関心を引けるので，鉱物などの標本に加えて，フィラデルフィア博覧会に参加させてはどうかと打診している。(Lyman 1875) (注4) このフィラデルフィア博覧会でのアイヌの展示は実現しなかったが，この資料は人種的な親縁性を推測してアイヌに対する強い関心を持っていた欧米社会が，アイヌの博覧会展示をおこなう企画を，一九世紀後半には既に持っていたことを示している。(Kreiner 1993)

このように一九世紀末から計画されていた，欧米の博覧会でのアイヌの人々の展示は，一九〇四年のセントルイス博覧会で実現する。セントルイス博覧会へのアイヌの参加を可能にして大規模な人類学展示を実現した背景としては，当時の欧米社会における，アイヌとアーリア人種との人種的親縁性に対する強い関心や，未知の民族への大衆の素朴な関心などがあった。しかし，展示を実現した主な要因としては，このような社会的背景だけでなく米国における社会制度としての人類学・民族学の発展と，その制度の中で大きな成果を上げる事を目論む人類学者の存在があげられるだろう。

人類学の歴史を研究するストッキングによれば，二〇世紀初頭の米国人類学には二つの潮流があり，それらは互いに対立していた。(注５)その一方は，後に文化人類学の基礎を作り上げる，フランツ・ボアズに代表される人類学者たちで，一九世紀の民族学の持っていたアマチュアリズムから脱し，専門的で科学的な学問領域としての新たな人類学を確立しようとしていた。しかし，ドイツ移民でユダヤ人という経歴を持ち，母国の科学主義的傾向を強く帯びたボアズは，当時の米国人類学界においては異端的存在だった。そのため安定した専門職に恵まれず，民族局（Bureau of Ethnology）で働きながら，博物館や大学での職を求めなければならなかった。当時，新設されたばかりのシカゴ大学の人類学部とシカゴ・フィールド博物館は，ボアズにとっても新規採用の機会だったが，一八九二年にシカゴ大学・社会学人類学部の初代人類学準教授として採用されたのは，従来の人類学の流れを汲むフレデリック・スターだった。

新たな人類学を構築しようというボアズらの試みの一方で，米国人類学で大きな影響力を持ち続けていたのは，ワシントン D.C. のアメリカ民族局を中心にした人類学者だった。彼らは一九世紀の民族学をもとにして，アマチュアの研究者や人類学分野以外の研究者も含む，非常に幅広い学問領域としての人類学を目指していた。その中心人物の一人が，一九世紀の民族学や進化主義の影響を強く受けた米国民族学会長のマクギーだった。(Kotani 1999, Stocking 1968: 124-132, 278-281, 284, VanStone 1993: 78-79) マクギーは当時のもっとも著名な科学者の一人で，亡くなったメジャー・パウエルに代わってワシントン D.C. のアメリカ民族局長になると目されていた。しかし，予想に反してパウエルの後任にはウイリアム・ホームズが任命され，敗れたマクギーは一八九三年以来勤めたスミソニアン協会を退職する。失意のマクギーが次に選んだのが，セントルイス博覧会の人類学部門責任者という職だった。(Washington Post, Aug.14, 1903, New York Times Aug.15,1903) この点からも，当時のマクギーが博覧会の人類学展示にかけた意欲が理解できるだろう。(注６) (Rydell 1984: 164, Hinsley 1991)

マクギーが計画した，かってない規模の人類学展示とは，どのようなもの

だったのだろうか。マクギーは，セントルイス博覧会における人類学展示の目的について，次のような点を挙げている。

(1) 身体的定義において，世界で最も知られていない，民族（ethnic types），人種あるいは亜人種を展示すること。

(2) 行動や精神的定義において，世界で最も知られていない文化の型（culture types）を展示すること。

(3) 人類の身体的，精神的特徴についての研究における，主要な方法や装置を展示すること。

(4) 人類進化の階梯や過程における典型的な証拠を示すこと。

(5) 統合と訓練によって加速される，野蛮や未開状態から文明に至る実際の人間の進化を示すこと。（Takada 1992: 33）

このような目的のもとに計画された人類学部門は六項目からなり，民族学，インディアン学校，考古学，歴史，人体測定学，精神測定学の展示が計画された。

そして，人類学展示の一部として，世界各地の「人種」が現地の小屋やテントで生活する姿を展示することが計画された。その住居は，故郷から運ばれた材料を使って自分たちで建てられ，人々は故郷と同じ仕事をし，同じ食べ物を食べ，現地の服装をすることが求められた。（Bennitt 1905: 673-674）その世界各地の「人種」のなかに，アフリカのピグミー，アルゼンチンのパタゴニア巨人，北米やフィリピン先住民などと共に，北海道のアイヌが含まれていた。

第四章　アイヌ展示までの経緯

人類学部門の責任者として，マクギーがワシントンの日本大使館にあてた，一九〇三年十一月十三日付けの協力依頼の手紙には，斡旋の手順から会場での生活までの計画が，次のように詳細に述べられている。

「アイヌの人々は，東洋の特異な先住民（aborigines）であり，米国先住民

とのいくつかの関連性が指摘され，特にその工芸や社会制度がアイヌ特有なものであるだけでなく，進化した人々のものと対照的なため，特別の関心が寄せられています。

私の考えている手順は，先住民に国の役人，あるいは，その認可を得た当人類学部門の仲介者が接触し，彼等の信頼を得た後に，いかなる経済的負担もなく，家を離れるあいだの充分な食事と衣服を保証して，この大規模な集団に参加して貰うことです。また参加者には，約束した期間内に安全に帰国することと，彼等自身あるいは役人が適当と判断するだけの種類あるいは金額の，贈り物あるいは代償を受け取ることを保証します。

民族学部門の第一の目的は，世界中の様々な人々に，種族や人種間の思いやりを高めるような相互観察と学習の機会を与えることです。それは，進んだ人々には，自分たちの先祖がたどった進化の過程をはっきりと認識させる手段を与えることになるだろうし，低い段階の人々には，発展の可能性と機会を認識することを可能にします。

この計画と同時に，模範的なインディアン学校が先住民集団に隣接して建てられる予定で，そこでは全ての先住民の若者だけに，手工科目と知的訓練の機会があたえられます。また先住民は，そのために運ばれた材料で，自分自身で建てた住居に，できる限り日常の姿で居住させる計画です。どの場合でも，充分な広さの土地に，無用な侵入者を避けるための囲いを設け，入り口を警官あるいは当部門の担当者に守らせて，適当な時間にだけ，学生や知的な訪問者だけが入ることの出来るようにします。」（外交史料館資料：北米合衆国ミゾラ州セントルイス市ニ於テ万国博覧会開設一件）

のちに詳しく紹介するように，セントルイス博覧会におけるアイヌの展示は，ほとんどこの計画通りに進められる。このような米国人類学者の活動の一方で，日本の人類学者はどのようにセントルイス博覧会の人類学展示に関わったのだろうか。当時の人類学研究の中心的存在であった坪井正五郎に，セントルイス博覧会の人類学展示への協力が求められたのも当然だった。しかし，臨時博覧会副総裁の松平正直から外務大臣にあてた，外交史料に見ら

れる坪井への要請は，経費の調査という間接的なものだ。

「客年十二月廿四日送付第六六七号ヲ以テ聖路易博覧会ニ『アイヌ』人列会ノ義ニ関シ御照会ノ趣了承，右『アイヌ』人列会ノ義ハ，もし若シ列会セシムルニ於テハ男女幼児ヲ一組トシ，之ニ添フルニ『アイヌ』部落ノ情態ヲ示ス諸般ノ出品ヲ為スヲ要シ度，依テ東京大学人類学教授坪井正五郎氏ニ託シ，右ニ関スル費用ヲ調査セシメ置候条，凡ソ一ヶ月ヲ経ハ右費用等判然スベキニ付，其上更ニ可及御通知候，此段回答旁々申進候也
明治三七年一月七日」(外交史料館資料：北米合衆国ミゾラ州セントルイス市ニ於テ万国博覧会開設一件)

またスターは来日後，アイヌの参加についての協力依頼を日本の博覧会事務局で行ったのちに，東京大学の人類学教室に坪井を訪問しているが，その際の様子を，『東京人類学雑誌』は次のように報じている。

「(スタール氏は) 坪井教授を人類学教室に訪はれ，アイヌの土俗品を見られたそうである，其の時の談話に，直ちに北海道に赴き，自身にアイヌを集むべしとの事であったそうであるが，近頃聞く所によると，既に五六名のアイヌは渡米の約が成って，目下は家屋の取毀ち中との事である。」(東京人類学会雑誌　一九〇四；二四六－二四七)

また，明治三八年（一九〇三年）の『東京人類学雑誌』にも，「セントルイ博覧会への出品」という記事が見られるが，そこには，東京帝国大学理科大学人類学教室から人類学上の参考品を出品することになったが，その参考品はパリ万博へ出品したのと同様の，石器時代遺物だと書かれているのみで，アイヌの渡米については何も触れられていない。(東京人類学会雑誌　一九〇三；一五六) このように，セントルイス博覧会におけるアイヌの参加への日本の人類学者の関与は，間接的なものにとどまっている。さらに，セントルイス博覧会でのアイヌの展示が，日本の人類学者にとって意図せざるもの

だったことが，『東京人類学会雑誌』の「セントルイ博覧会の人類学部」と題した次のような記事からうかがわれる。

「(人類学館は）部を分ちて土俗学部，インディアン学校，考古学部，歴史部，人体測定及び心理測定部の五に分かたれるゝものにして，土俗学部は世界諸種族の生活状態を示すにありて，丈高きもの，丈低きもの，色黒きもの，石器使用のものなど一地に集められて，アメリカのインディアンは固より，中央アフリカのバタワ及び赤ニグロ，南米のパタゴニア，中央アメリカのセリ，フィリッピン土人など各種族を集め，その中に我北海道アイヌもありて現今日本が驚くべき進歩発達の状を知らんには其原始状態を見て教育の効果を悟るべしとありて，アイヌと我等日本人とを同一種族と見られるは疎忽といふべし。」(柴田　一九〇四：二四〇)

当時の資料から，セントルイス博覧会へのアイヌの参加には，当時の外務省や北海道庁の園田長官による，渡米と国内の協力者についての承認を必要としたが，参加者の選定から渡航手続き，費用の支払い，北海道からセントルイスまでの実際の旅行，現地での生活のすべてが，米国の人類学者とバチェラーらの民間人によって企画されたことが明らかである。(Starr 1904，バチラー　一九九三）また日本の人類学者は，このアイヌの展示に否定的あるいは消極的だったといえるだろう。かって留学生として一八八九年のパリ万国博覧会を「心から感服」して見学した経験を持つ坪井正五郎は，万国博覧会のなかで人類学上観察する価値のある場所として，「人類住居の発達を示す諸建築，野蛮未開人種の村落，人類学温故博物場」などを挙げている。(坪井　一八八九）しかし，坪井が海外の人類学展示を評価する一方で，他の人類学者は，海外の博覧会で「我北海道アイヌ」と「我ら日本人とを同一種族と見られる」ことに否定的である。このような日本の人類学者のアンビバレントな態度は，地図や模型，図表や写真を中心にした当時の「科学的」展示とは異なった，「前近代」的な見世物と連続性をもつヒトの展示を，どのように解釈するかという混乱を反映しているだろう。また第二の理由としては，「日本人」

としての一体化を前提として「我北海道アイヌ」を語る日本人が，西洋＝文明社会との一体化と西洋からの差別を意識することによって，「アイヌと我等日本人とを同一種族と見られるは疎忽」だとしてアイヌを差別してしまうという，同化と差別の重層的な連鎖を挙げることができるだろう。(宮武　二〇〇五，金城　二〇〇五) このようなアイヌと日本人の人種的同一性を強く否定する日本人については，スターも記録している。(Starr 1904: 98)

セントルイス博覧会では，シカゴ博覧会と同じように，人類学展示とは別の二つの区域で先住民の展示を見ることが出来た。その一つは博覧会場の南側に設けられたパイクと呼ばれる余興のための展示地域だった。パイクには，シカゴ博のミッドウェイ・プレザンスと同じく巨大な観覧車が設けられていたほか，チロル・アルプスとドイツ風レストラン，ボーア戦争の戦闘シーンの再現，動物ショーなどに混ざって，オリエント風の見世物や日本の歌舞伎などが行われていた。

さらに，博覧会の六年前に米西戦争に勝利しフィリピンを支配したばかりの米国は，四七エーカーの広大な敷地をもつフィリピン保留地の植民地展示で，植民地帝国としての米国の成果と責務を示していた。そこには六つの村が作られ，四十の部族からなる千二百人のフィリピン先住民が集められていたが，そこでは学校教育や軍隊の訓練を通して，「未開」のイゴロット族やモロ族と，「文明」化されたカトリック教徒や七百二十五人もの軍人を対比させ，「文明化」の過程を可視化していた。(Fox & Sneddeker 1997, Clevenger 1996, Breitbart 1997)

このように，セントルイス博覧会における先住民展示は，基本的にシカゴ博覧会と同じく，人類学展示，植民地展示，そして余興や見世物のための展示という三つの区域で行われていた。しかし，科学の一部門として制度的に発展しつつあった人類学による展示と，個別の植民地主義帝国を基本にした植民地展示は，従来の博覧会と比較して格段に規模が大きくなっていたが，このことは，地理的・質的に普遍性をもった科学と個別で特殊な文化の領域が非常に純化された「近代」社会が二〇世紀初頭にその姿を急速に整えつつあったことを反映していると言えるだろう。(Latour 1993, 宮武　二〇〇〇)

第5章　アイヌの渡米

マクギーの計画のもとに日本へ向けて出発したのが，シカゴ大学人類学部教授に就任したばかりのフレデリック・スターだった。(注7) スターは，マクギーから五月一日までにアイヌの人々を渡米させるよう依頼され，博覧会会長のフランシスから，東京のルイジアナ割譲博覧会協会へあてた紹介状を携え，メキシコ人写真家の助手マニュエル・ゴンザレスと共に一九〇四年一月一八日にセントルイスを出発した。スターは遠征資金として二五〇〇ドルを受け取ったが，そのうち千ドルがスターへの報酬だった。そして，二月九日に横浜港に上陸し翌日には東京に到着している。そして，列車を乗り継ぎ二月一八日に札幌を訪れたが，アイヌ研究としても著名なバチェラーに偶然に出会い，セントルイス博覧会への協力を依頼している。バチェラーは聖公会に属し，布教活動のかたわら，アイヌ語辞書の編纂をはじめとするアイヌ研究を行い，一八八〇年代以降数多くのアイヌに関する著作を出版したほか，京浜地方や阪神地方を回ってアイヌの窮状を訴えていた。スターは，札幌到着の翌日に北海道庁長官を訪問し，バチェラーへの協力要請をおこない，その承認を得て道庁の通訳と共にバチェラーを訪れて，バチェラー本人の同意を得ている。(VanStone 1993: 79) バチェラーは『わが人生の軌跡』の中で，当時の出来事を次のように書いている。

「一九〇三年(明治三六)の秋に，シカゴのスター教授が札幌にやってきて，彼とともに，セント・ルイスの博覧会に出演してもらう数人のアイヌを連れていきたい，という申し出をしてきました。私は彼を北海道庁長官の園田男爵に紹介しました。男爵から私に，教授のために数人のアイヌを探すように，と要請がありました。少し手間取ったのですが，私たちは四人の男性，三人の女性，二人の子供を集め，教授と一緒に渡米することになったのです。」(バチラー　一九九三)

また自叙伝の中でも，「アイヌ人アメリカへ行く」と題して，次のように書かれている。

「明治三七年(一九〇四)二月私は用事の為，岩見澤に居りましたが，其時，突然 Starr（スター）博士（お礼博士）と申すアメリカの方に會ひました。其の方は寫眞を撮る為にメキシコの雇いを連れて居りました。スタア博士は私の居た家にこられて『私は今アイヌの方を，アメリカの St. Louis Exposition (セントルイス博覧会)に連れて行きたいと思って捜して居ります。それについて貴方の御力をおかし下さいませんか。』と申しました。

『さあ，それは大きな問題ですからもっと委しく訳を伺った上よく考えないと，ご返事が出来ません。二日位お待ち下さい。其の後ご挨拶致しませう』と申して早速札幌へ帰って直ぐ園田長官に会ひ其のことを話しました。同時にスター博士も長官にお目に掛つて申しましたので長官は『それは宜しいです。バチラー先生もどうぞ博士を助けて上げて下さいませ』と申されましたので，私はスター博士と共に二月二十二日札幌を発って日高の國沙流川を上ってオウコツナイ迄行き，途中で人を選んでアメリカへ行く事を契約致しました。選んだ人達は男四人，女三人，子供二人の九人で，皆喜んで行く事を承知いたしました。

之等のアイヌの人は稲垣先生とスター博士と寫眞を撮るマヌエルさんとに連れられて，三月七日札幌を発ってアメリカへと行きました。」(バチラー　一九二八：二九十－二九一)

スターの『The Ainu Group』によれば，見知らぬ異国への初めての旅行に身支度を整えたアイヌは，出発に先立って村で集会を開いたが，もう再び帰ることのない死者を見るように，人々が泣いたという。参加したアイヌのうち，ヤゾウ（大沢弥蔵）は十四歳の時から十年間もバチェラーのところで働き，スターが札幌のバチェラー宅を訪れた際に会った最初のアイヌだった。ヤゾウは自宅に小さな農場をもち馬を飼うほど「進歩的」で，その妻のシラケと共に，他のアイヌとの調整役として最初に選ばれた。(Starr 1904: 16)ま

た，ゴロ（辺泥五郎）も札幌でバチェラーに仕えていたため，博覧会に参加するには相応しくないと思われたが，本人の強い希望と，陽気で活発な青年が加わる事が参加者に良い影響を与えるとの期待から参加が許可された。そしてアイヌ以外では，東京で神学を学び英語の話せる稲垣が通訳として一行に加わった。さらに，これらの一行が居住するための二棟のチセは，平取から運ぶのが困難なため，すでに鉄道の引かれていた白老で四〇円で購入され，汽車で港まで運ばれた。九人のアイヌと，一人の和人，一人のメキシコ人，一人のアメリカ人からなる一行は，三月七日に札幌を発ち，室蘭を経たのち海路横浜に向かった。そして，出航前に一行は東京にしばらく滞在した。

外務省の外交史料館に残されている，北海道庁発行の海外旅券下付表には，以下のような明治三十七年三月三日と三月五日に旅券を下付された，七名のアイヌの名前を見ることができる。三月三日に同時に発行された六名の旅券は以下の通りであるが，全て族称蘭には「北海道平民」，渡航先は「北米合衆国」，渡航目的蘭には「従僕として外人同行」と書かれている。

旅券番号	氏　名	本籍地	年　齢
七〇八五八	平村クトルアイノ	沙流郡平取村三九	三十八年三ヶ月
	同　しゅつらもてき	同	三十五年三ヶ月
	同　キク	同	二年三ヶ月
七〇八五九	平村サンケア	同	五十六年三ヶ月
	同　さんとくぬ	同	五十三年三ヶ月
	同　きん	同	六年

このほか三月五日に，邊泥五郎の旅券が六名とは別に発行されているが，族称蘭には「北海道平民」，渡航先は「北米合衆国ミッソリー州」，渡航目的覧には「博覧会へ」と書かれ，年齢覧は空白になっている。

旅券番号	氏　名	本　籍　地
七〇八六一	邊泥五郎	釧路市釧路村字春採番外地

これらの史料で興味深いのは，すべての族称欄に和人と同じように「北海道平民」と書かれている点だろう。すでに，一八九九年には「北海道旧土人保護法」が公布され，一九九七年に廃止されるまでの約一〇〇年間，法律上は「旧土人」という蔑称が存在し続けた。そして，アイヌの戸籍には，族称欄に「旧土人」と記されていたことが知られている。（藤本　二〇〇二；五六）しかし，一九〇四年のセントルイス博覧会参加のために，北海道庁という政府の下部機関において作成された旅券資料において，アイヌは和人と同じ「北海道平民」として扱われている。これは，バチェラーや稲垣によって旅券申請が行われ，「北海道平民」と記入された申請がそのまま記録されたためだとも考えられるが，いずれにせよ，当時の行政資料では和人とアイヌは同様に扱われ，アイヌと和人の境界が明確に意識されていなかったといえるだろう。この点は，アイヌと和人を差別した一九一〇年の日英博覧会にける旅券下付表の場合と異なっている。（宮武　二〇〇五）また，六名の渡航目的蘭に「従僕として外人同行」と，スターとゴンザレスを従僕として書かれているように，アイヌと「外人」の支配 ── 従属関係も，「外人」を支配者や優越者と見る一般的理解とは逆転している。これらのことは，一般に理解されている，白人，日本人，アイヌという当時の人種的ヒエラルキーが，この資料には反映されていないことを示している。このように柔軟なアイヌと和人やアメリカ人との関係は，後に紹介する博覧会開催中のさまざまな出来事からも伺うことが出来る。

第 6 章　米国への憧れ

先に述べたように，横浜に着いたアイヌの一行は東京で数日を過ごした。その様子を新聞が報じ，音信不通だった平村サンケア（記事では「手村」）の息子がその記事を読み，突然尋ねて来るという出来事があった。『北海タイムス』は，日露戦争についての記事の片隅に，「アイヌ酋長，父子の奇遇」と題して，次のように報じている。

「日高国沙流郡平取村一八一〇番地酋長手村リトロケ（三八）は，妻スツラキ（二五）長女キク（三つ）手村サンケア（五〇）夫サントクノ（四〇）長女きん（七つ）同村大澤ヤサク妻ムメと共に米国聖路易の大博覧会へ用務を帯びて渡欧する筈にてかねて東京牛込区市ヶ谷田町一丁目二番地下宿業佐村わか宅へ止宿し渡米の日を待ちおりし処サンケアの倅トウペキが今を去る一五年の前に英国人パーラルタン氏に就いて修行のため上京したる儘音信絶えにし故今回渡米する前に一目逢わんと尋ね居りしが（中略）一五年目にめでたく父子の再会を遂げたるがトウペキは父と共に渡米せんと言出したるも許されず追って再会を期して立別れしという。」（北海タイムス　明治三七年三月二九日）

この父子の再会については，スターも『アイヌ・グループ』に次のように書いている。トウペキ（Tuperek）は，バチェラーと生活したこともあり，和装で髭もなかった。そして当時は，宣教師のパーラルタンと離れ，前代議士後藤修三の食客となり，ある扇情的ジャーナリズムのための仕事をしていた。若いトウペキは出発前日にスターに会い，新聞記事のようにセントルイスへ同行させてくれるよう懇願した。しかし，依頼されたのが出発前日のことで，旅券や書類の準備が間に合わず，トウペキは米国への渡航を断念せざるをえなかった。(Srarr 1904; 92)

また，バチェラーに懇願して博覧会行きを実現した辺泥五郎も，「明治三七年に米国セントルイス市に大博覧会があり，アイヌ代表三夫婦が行くので，自分も行きたくて耐えられず，無理に願っていけるようになった」と，当時の渡米への強いあこがれを語っている。（ライト前川　二〇〇三；三二二）

このような明治後期の日本における青年の米国へのあこがれには，長い在米経験を持つ社会主義者の片山潜が大きな影響を与えていた。一九〇一年に刊行された，片山潜の『渡米案内』は一九〇九年までに一四版を重ね，その後の『続渡米案内』もベストセラーになっていた。また，雑誌『社会主義』は「渡米協會機関」と副題をつけ，一九〇四年二月から一二月まで片山潜の「米国だより」を連載していた。片山潜は 1904 年にアムステルダムで開催さ

れた第二インターナショナル大会に参加する途中にセントルイス博覧会を訪れ，帰国後には『社会主義』に「聖路易博覧会ーフェヤー，ジャパン」と題する報告記事を掲載している。(片山　一九〇四)また，このような時代の空気は，小説にも見ることができる。一九〇六年に出版された島崎藤村の『破戒』では，主人公に「亜米利加の『テキサス』で農業に従事しようという新しい計画は……希望をささやい」ていた。セントルイス博覧会当時の日本社会では，アイヌと和人を問わず，幅広い社会階層の若者のあいだで，渡米や移民熱が全国的に高まっていたのだ。(片山　一九六〇，高　二〇〇〇)

第7章　博覧会場におけるアイヌ

トウペキを東京に残したアイヌの一行は，三月一八日に横浜港を出航して三月二九日に西海岸のビクトリア港に上陸し，シアトル経由で陸路，博覧会場のセントルイスに向かった。(Starr 1904: 76-92) そして，四月六日にセントルイスのユニオン駅に到着した。かれらは荷物より先に到着したため，貨車二・三台分に相当する荷物が付くまで，一次的にインディアン民族保護地区での仮住まいを余儀なくされ，不自由な生活を送らなければならなかった。しかし，荷物が着くや否や，故郷そのままの住居を自分たちだけで作った。(Stevens 1904: 87) そして，博覧会開幕日の四月三〇日から約一ヶ月後の五月二二日に，マクギーをはじめとする招待者の前で，奉納の儀式が行われた。(VanStone 1993: 85) フランシスによる『一九〇四年万国博覧会』の「人類学」の章には，博覧会に参加したアイヌについて，次のような詳しい記録がみられる。

「アイヌのグループは，すべて日本の北海道(同じ名前，あるいは蝦夷として知られる島を含む) という行政地区の村から来た四家族を代表する九人からなっている。彼らとその住居，そして持ち物はシカゴ大学のフレデリック・スター教授によって博覧会にもたらされたが，その特筆すべき旅行については，博覧会場で販売されている本に詳しく書かれている。知られている限り

では，彼らはその種族の中で初めて海を渡った者であり，初めての米国訪問者であることは確実だ。(中略)日本の中でさえ，彼らはほとんど知られておらず，一九〇三年の大阪勧業博覧会に小規模のグループが参加したり，ときおり数人がサーカスで見られる程度である。一九〇四年のセントルイスにおける六〇〇人を超える日本人居住地の中で，ここに来る前にアイヌを見た事のある人は一人だけだった。会場のアイヌグループは以下の通りである。

名　前		年齢	出身	職　業
サンゲア・ヒラムラ	男	五七	平取	農夫
サントゥクノ	妻	五四	平取	
キン	娘	六	平取	
クトロゲ・ヒラムラ	男	三九	平取	熊猟師
シュトラテク	妻	三七	平取	
キク	娘	二	平取	
ヤゾウ・オオサワ	男	二三	新冠	農夫
シラケ	妻	一八	新冠	
コロ・ベテ	男	二六	札幌	召使

(Francis 1913: 525-526)

これらの氏名や年齢は，先に述べた海外旅券下付表におけるものとほぼ同じである。フランシスはこのあと，「顔と身体的特徴は白人（Causasian）の基準に一致しており，肌の色もまた白人に似ている－中欧や米国よりやや暗いが，黄色でも茶色がかったのでもなく，むしろコサック人(Cossack)のように灰色か黒みがかった色である」と，身体的特徴が白人に近く，肌の色も黄色人種より白人に近いと紹介している。

ところで，米国で発行されていた日本語新聞，『日米週報』の博覧会特集号には，日本人記者が，博覧会場のアイヌの人々から直接取材したと思われる「北海道のアイヌ」と題した記事が見られるが，そこにはいくつかの興味深い内容が含まれている。そのひとつは，博覧会に参加しているアイヌは，日高国新冠郡高口村および沙流郡平取村の出身で，「我国語を語るもの三名あり。殊に大沢弥蔵の如きは小学普通科を卒業する力あり」と書かれている点だろ

う。スターの『アイヌ・グループ』には，参加したアイヌの全員がある程度の日本語を話したと書かれているが，二人の子供を含めた九人のアイヌのうちで，流暢な日本語を話せるものが，おそらく長くバチェラーと共に生活をしていた大沢弥蔵とシラケの夫婦と，辺泥五郎の三人しかいなかった事を示唆している。(Starr 1904: 82) このことは，日露戦争直後のキリスト教伝道の困難について「日本人教役者はアイヌ語がわからないので，日本語説教したり指導したりするが，アイヌにはその日本語が分からなかった」と書かれている事からも理解できる。(バチェラー　一九六五；二三八) さらに興味深いのは，これらのアイヌは，「一日一円で博覧会に雇われたり」とも書かれている点だろう。("Japanese-American Commercial Weekly: World's Fair Souvenir Edition" 16 July 1904) この「一日一円」の日当は，当時のどれ位の価値を持っていたのだろうか。セントルイス博が行われる約十年前だが，バチェラーの一八九三年の日記には，「二人のアイヌ人を，三ヶ月間沙流地方で月七円で雇いたい」との記述が見られる。(バチェラー　一九六五：一四七) また活況を呈していた，明治四二年（一九〇九年）当時の北見地方における漁業従事者の臨時雇賃金でも，男で一円から七〇銭，女で六〇銭から三〇銭だった。さらに，最盛期といわれた明治三五年の紋別のマッチ製軸工場での一日の賃金も，男が六五銭から五〇銭，女が三五銭から二〇銭にすぎなかった。(新紋別市史・上巻，一九七九；一一三二，一一四六) このように，長期の博覧会期間中に保証された一日一円の日当と，工芸品などを販売して得られる収入は，当時としては非常に高額の報酬であったと考えられる。(注８)

さきに述べたように，博覧会に参加したアイヌの人々の多くは，まだ日本語を十分に理解せず，アイヌ語を日常的に話していた。そして，クトロゲのように農業には従事せず，狩猟をその生業としている人物が含まれていた。言い換えれば，日本の国語教育や経済活動に組み込まれる直前のアイヌ社会に生きる人々が，米国の博覧会に参加したのだ。(注９) また，博覧会を訪れた米国人のみならず，当時の日本人自身が，アイヌの人々と接触した経験がなく，アイヌについての知識をほとんど持たなかったことが知られている。(Stevens 1904: 87, Breitbart 1997; 63) それでは，米国人にとって博覧会の

アイヌの人々は，どのような印象を与え，どのような存在として理解され解釈されたのだろうか。

当初は好奇のまなざしで迎えられ，チセに居住して故郷に近い形で生活するアイヌの人々が，次第に周囲の人々に一種の畏敬の念を植え付けていった事を，当時の博覧会記録や新聞などの資料が次のように報じている。

「(アイヌは人類学部門によって，低い文化の身体的特徴を持ったものとして選ばれたが) ある意味での未開性にも関わらず，彼らは会場内でもっとも清潔で礼儀正しく，もっとも紳士的で上品な人々だ」(Bennitt 1905: 674-675)

「彼らの住居は粗末な藁葺き小屋だが,彼らは非常に優しい心を持った礼儀正しい人々である。」(Reid 1904; 281)

「アイヌの人々は色白で毛深い。彼らは穏やかで親切である。彼らの藁の家には，窓として四角い穴があけられている。アメリカの見物客は，いかがわしい見せ物のように，この窓から中を覗き込んで，アイヌの人々を非常に怒らせた。アイヌの慣習によれば，居間の北東の角は聖なる場所である。そこには家族の宝物である弓矢，剣や槍が吊られている。祈祷用の棒は炉部の床に立てられている。これらの棒は柳の枝で，削られた部分が付属している。アイヌの人々が世界博覧会に彼らの家を奉納したとき，彼らは深い祈祷者の態度と仕草で行ったので，訪問者は本能的に帽子を取るほどだった。」(Stevens 1904: 142)

バチェラーは『アイヌの伝承と民俗』のなかで，アイヌのエチケットとして,「東の端の窓から物を見たり，物を投げないように注意すべきだ。というのは，東の端の窓は非常に神聖だからである」と述べているが，そのようなエチケットに無知な見物客に対してアイヌは怒ったのだった。(バチェラー，一九九五；一八〇) 別の新聞は，神聖な窓から覗かれたアイヌの一人が，見

物人に灰を投げつけたという事件を報じている。その記事は，アイヌの人々の普段の穏やかさと，神聖な意味をもつ窓から覗くことがアイヌ文化において重大な違反行為であることを述べたあと，日常生活におけるアイヌの作法は，米国人自身にとっても模範的なものだと，つぎのように書いている。

「金曜日の午後，約一五人の人々が許可無く一度にアイヌの家に入り込んだ。彼らの世話をしていた部屋係のアリソン氏が近くにいたので，アイヌは人々が出てゆくように頼んだ。人々が出てゆこうとしたとき，見物人の一人の女性が『彼らが何のためにここにいるか知りたかったのに』と声を上げた。そこで，世話係のアリソンは穏やかな声で次のように言った。『彼らは，アメリカ人に上品なマナーを教えるために，ここに居るんです』。」(St. Louis Post-Dispatch, May 22 1904)

また「博覧会の日本先住民は勤勉」と題した当時の新聞も，アイヌの勤勉さについて次のように報じている。

「(この写真は) 観客におみやげとして売るために，アイヌ族が柔らかい樹を削って，スプーンやタバコ箱を削ったりして，日常の仕事をしているところだ。常に注文を捌ききれないので，彼らの販売用の在庫は決して膨らむことがない。彼らの仕事への求めは，非常に大きいのだ。」(St. Louis Globe-Democrat, 23 June 1904)

このようにアイヌの人々の信仰心や礼節，勤勉さを高く評価する言説は数多く見られる。博覧会におけるアイヌの人々は，セントルイスの人々との日常的な接触を通して，時には衝突しながら相互理解を実現し，捌ききれないほどの注文を受けて，工芸品の制作と販売に励んだのだ。これらは，西洋人が先住民を「高貴な野蛮人」として見る，ルソー以来のオリエンタリズムを反映したものとして批判されるかもしれない。しかし，セントルイス博覧会におけるアイヌの人々の日常の振る舞いは，実際の世界とは切り離された想

像上の言説や表象の領域でなく，八ヶ月もの長期間生活することで実現したリアルな日常的接触と交流の実践の結果として，多くの人々に深い感銘を与えたのだ。博覧会におけるヒトの展示そのものが，植民地主義によって実現され，「未開」へのまなざしを孕んだ「文明」の側からのものだったとしても，博覧会場は人々が実際に生活し，外部世界と接触し交流する居住(dwelling)空間の実現だった。そのような居住空間における日常的実践そのものが，まなざしの孕む虚構性や誤解を暴き出し，新たな視線と解釈，まなざしの変容を引き起こしていったといえるだろう。(Ingold 1996; 115-117, Haraway 1988) またそれは，米国人にとって異文化との接触による自文化の相対化であり，「自己反省と自己成長のために文化的豊かさを用いること」に他ならなかった。(マーカス・フィッシャー 一九八九)

第8章 アイヌの帰国

博覧会に参加したアイヌの人々が，七ヶ月余りのセントルイス滞在を終えて帰国したことが，一九〇四年一二月六日の現地紙に「アイヌ故郷へ出発(Ainus start for home)」と題して報じられている。これらのアイヌの人々は，博覧会に来ていた先住民のなかで最後まで残っていた集団だったが，帰国直前に博覧会会長のフランシスを訪れ，男性には黒い布の帽子，女性には金の鎖が付きピンクのバラの刺繍が入った白い絹のハンドバッグ，子供にはスリッパが，お土産としてプレゼントされた。その後，博覧会人類学部門のハルバートにバンクーバーまで付き添われて，アイヌの人々は日本への帰路についた。(St.Louis Post-Dispatch, Dec.6, 1904) このように，当初は好奇の念で迎えられた人々も，長い現地での生活を終えてセントルイスを去る時には，博覧会への協力者として，高い地位にある大会責任者から女性や子供を含む一人一人に土産が贈られ，出港地まで付き添われて帰国の途についたのだ。

北海道に戻った帰国後の九人のアイヌの消息について，残された資料はわ

ずかである。スターは『セントルイス博覧会におけるアイヌ・グループ』で，帰国して故郷に戻ったアイヌの人々について，つぎのように書いている。

「村を離れていたアイヌが戻った蝦夷では，その帰郷は人々にとって特別な出来事になった。村人全員が集まったところで，帰国者の一人が代表になった。その代表と他の旅行者たちは，向かい合って座った。そしてまず，家を離れていた代表者が歌い始め，その冒険について語り，どこへ行きどんな事をしてきたかについて話した。やがて，他の者に代わり，旅行者たちが不在中の村の出来事について歌い始める。そして彼らは交代に，両方の物語が終わるまで歌い続けた。アイヌ・グループが帰国したとき，彼らは死者が蘇ったかのように受け取られたのだろう。……これらの貧しい仲間たちは，沙流川渓谷の故郷の村々から遠く離れたところで，彼らが見た人々や場所について，どれほど多くのことを歌わなければならなかった事だろう。」(Starr 1904; 116-118)

このほか，博覧会で工芸品などを販売し，大金を稼いで帰国したアイヌの婦人について，バチェラーは次のように述べている。

「契約により，二年経って，彼らはみな帰って来ました。彼らが到着した日，女性たちの中の一人が私のところにやって来て，七〇〇円稼いできたので，そのお金を預かってくれないものかと言ってきました。彼女は袋類や装飾を施したクッションを作り，それで，そのお金を得たというのでした。
しかし，今，彼女が戻ると自分の息子がある日本人の友人のために，そのお金を借りたい，というのです。彼女は自分の息子に，そのお金を渡すのは賢明でないと考えました。もし，私が彼女を助けてやらなければ，きっと彼女は息子からそのお金を守ることは出来ないであろう。私は彼女に，それを預り銀行に入れ，彼女の必要に応じて，出せるようにしてあげますと言いました。
彼女は喜び，すぐに角の方に入って行き，やがて紙幣を一束，持って戻りま

した。それは，とても暖かくて，ひどく臭い匂いがしました。どこに，そのお金をそんなに大事にしまって置いたのかのか，と尋ねると，彼女は，『わたしのウプショロクツの中です』と答えました。
ウプショロクツ，というのは，アイヌの結婚している女性の，人には見せない，家や一族の腰帯なのです。数ヶ月後，彼女は私のところにやって来て，自分の家を建てたいので，あのお金を，おろしたいと言いました。彼女はそのお金で家を建てたのでした。その家は日本人の設計による立派なものでした。」（バチラー　一九九三）

セントルイスへ行ったアイヌの人々が，大金を持って帰国したという同様の話は，バチェラーの自叙伝にもみられ，「皆ほとんど千圓位儲けて参りましたのですから喜んで楽しんで各々の里へ帰りました」と書かれている。（バチラー　一九二八：二九一）さらに，アイヌの婦人が博覧会で稼いだ金で家を購入したという話は，米国側に残された資料にも見ることができる。バンストーンは，スターの作ったスクラップ・ブックの中に，一九〇五年八月頃と思われるひとつの新聞の切り抜きを見つけている。それによると，万国博覧会中にアイヌに対して特別の関心を持った一人のセントルイスの夫人が，帰国したサントゥクノから一通の手紙を受け取った。その手紙には，彼女と夫のサンゲヤがセントルイス博覧会で稼いだお金で，新居を建て，馬と豚を購入することが出来たと書かれていた。（VanStone 1993; 89）このことは，本格的な日本語教育を受けることのなかったアイヌ女性が，セントルイス博覧会中に，英文で文通を続けるだけの語学力を学習していたことをうかがわせる。

一九〇九年から一九一〇年にかけて日本を再訪したスターは，一九一〇年の三月に平取を訪れたが，六年の間に伝統的なアイヌの住居が大きく変容し，多くの住居が半日本的なものになってしまったと驚いている。その際に，セントルイス博覧会の参加者と再会したが，その様子が次のように日記に書かれている。

「朝，サングエア，サンテュクノ，キンが早く訪れた。三人は我々に再会できて喜んだ。私が予想したとおりに，老女がいちばん喜んでくれた。彼女は私の手を取ってキスした。キンはもちろん成長し，大人になっていた。彼女はブライアント嬢の学校に通っており，日本式の服装だったが，きちんと手入れの行き届いた服装だった。
コロトゲ，シュトラテク，キコもやってきた。子供はあまり魅力的でなくなっている。予想していたよりも，歩き回ることをしない。驚くことはないのだが，彼女は我々を覚えていないという。キンは完璧に覚えているのだが。」(小谷　一九九四；八九)

終章　博覧会の記憶

本稿の最後に，セントルイス博覧会に関する資料とともに，参加者の一人である，辺泥五郎氏の残された資料や思い出をとおして，セントルイス博覧会の記憶を辿ってみたい。(注 10) ここで博覧会の記憶と呼ぶのは，序章で述べた，非文脈的な客観性や法則性，あるいはあらかじめ書きつけられた出来事の再構成としての歴史とは異なった，ある時空間に据えられた人々のネットワークが作り出し，現在も生きる，あるがままの断片が生み出すものである。アイヌの人々にとっての博覧会とは，アイヌ，日本，そして西欧という異質な要素の境界が不断に更新される時空間だったといえるだろう。博覧会場という居住空間で，アイヌの人々はその実践を通して複雑な境界を日常的に横断し，人々の認識や概念を揺るがし，同時にキメラのような自己のアイデンティティをも自己成型していったといえるだろう。そのような流動的で不定形な実践のプロセスとして博覧会を把えるには，その記憶に依拠するのが必要だと考えるからである。

ここで紹介する辺泥五郎氏は釧路に生まれ，函館の伝道学校に学び，鵡川町で教会を開いた。(藤本　一九七三：二一二)

「勇払郡鵡川村字珍部落にある珍聖公会は伝道師邊泥五郎翁があづかっている。翁は明治十一年生れで，今年六十五歳。もと釧路の春採部落の出で，誠実そのものゝような人である。今の珍部落に来たのも明治三十九年からで，方に三十七年間，人望を一身に集めている。かってアメリカのセントルイスで世界の人種博覧会とかが開かれた時には，選ばれて出場している。」（村上一九四二：一二七）

また，村上の記録から少し下った昭和二十一年十月に，「特志伝道師邊泥五郎翁」を訪問した際の記録が『前川眞二郎著作集』に見られる。「翁は白髪白髯の好々爺，明治十一年十月九日生れ六十九歳，釧路の人なり。翁は炉を囲み，茶を煎して徐々に彼の一生の回顧談を初めらる」という前書きに続き，次のような思い出が述べられている。

辺泥五郎氏は，十勝を経て平取，鵡川経由で明治三十年三月五日に札幌へ出た。そして，「バチラー師は病室を開き，アイヌ人を集め，師自らもアイヌ語を研究し，アイヌ語を互いに語り合いて生活し居ると聞き」，バチェラー師宅に宿泊するようになったが，三十年六月十八日にはバチラー師より洗礼を受けている。その七年後には，先に述べた経緯でセントルイス博覧会に参加している。

「明治三十七年に米国セントルイス市に大博覧会があり，アイヌ代表三夫婦が行くので，自分も行きたくて耐えられず，無理に願って行けるようになった。我等には英語が解らぬから，稲垣長老さんが通訳となられた。博覧会は仲々骨が折れたが，愉快な思い出もある。

その時，百二十五歳と百十七歳の米国三婦人がアイヌに興味を持ち，歳々訪ねて呉れた。

滞米は四月四日より十二月二日までの八ヶ月でした。実は博覧会終了後尚お一，二年彼地に留まりたいと思ってバチラー師に許可を願ったが，その返事の到着せぬ中に一行は帰途につくこととなり，且つ稲垣氏は頑として許して呉れなかった。(注 11) 私は残念至極でしたが，帰国した。バチラー師が我等一行を駅頭で迎えてくれたが，私を見るや否や『お前はなぜ帰ってきたの

か，もう少し彼地で勉強してくれば良かったのに』と申され，私は再び残念でたまらなかった。

私はバチラー師から教育を受け，明治三十九年に伝道に着手し，同四十年十一月三日に珍（鵡川郡）に赴任いたしました。」（ライト前川　二〇〇三；三二二－三二三）

ところで，辺泥五郎氏の孫娘に当たる近森聖美氏が所蔵されている辺泥五郎氏の写真帖には，米国の図書館や歴史学協会に残された記録写真と同じ，アイヌの人々の写真だけでなく，「在米中の友人」と記された写真が多く含まれ，その中にはこの回顧談で述べられている，クリークハンス一家と書かれた米国の三姉妹や，他の米国人家族の写真などが多く含まれている。これらの写真は，博覧会期間中に，アイヌの人々と米国人の親密な交流があった事を示している。

また，閉会前の十一月三日午前十時に撮られた，多数の日本の博覧会関係者との集合写真では，日本人関係者のあいだに辺泥五郎，大沢弥蔵・シラケ夫妻の姿を見ることが出来る。そこには服装以外に和人とアイヌを区別するものは見られないが，先に紹介した旅券資料からも理解できるように，セントルイス博覧会では，アイヌと和人のあいだに大きな制度的区別はなく，日本語を理解するこれらの三人のアイヌの人々は，日本の博覧会関係の多くの行事に参加していたと考えられる。この他の日本の博覧会関係者との集合写真でも，十一月に日本庭園でとられた二枚の記念写真に三名のアイヌの人々が写っている。これらの写真は，博覧会場におけるアイヌの人々が異質な他者として排除され一方的なまなざしの対象とされていたのではなく，米国人や和人との交流が頻繁に行われていた事を示す重要なものだろう。

また，セントルイス博覧会では，博覧会専属の女性写真家ビールズによる優れた記録写真が数多く残されている。(注 12) その中には，近隣のテウェルチェ女性（パタゴニア女性）と親しく交流する，平村さんとくぬ（サントゥクノ）の写真も含まれている。(注 13) これらの，セントルイス博覧会におけ

るアイヌの公式写真は，対象を開かれたものとして，あるがままに写し出そうとするものだろう。それらは，権力性を孕んだ他者表象という時代の限界があったにせよ，西欧や非西欧のヒトや文化を，相対的な閉ざされた領域に押し込めるのではなく，相互理解や共存を可能にする実践の主体，あるいはエージェンシーとして写し出そうとするものだったといえるだろう。

さらに，辺泥五郎氏の残された遺品のなかには，白，赤，緑，黄，濃い青，薄い青の六色のビーズで作られた，北米インディアン・シャイアンの工芸品と思われるブレスレットが含まれていた。(Dean 2002; 22) このビーズのブレスレットは，テウェルチェ女性と交流するアイヌ女性の写真が先住民同士の交流を描いているように，博覧会会場でのアメリカ・インディアンとアイヌの人々との交流があったことを伺わせている。また，辺泥五郎氏の写真帖には，アメリカ・インディアンらしい風貌の人物の写真も残されている。

近森氏によれば，辺泥五郎氏は博覧会の出来事について多く語ることはなかったという。しかし近森氏は，「おじいちゃんは，バチェラーさんからもらった椅子に座って，縁側でよく編み物をしていた」と，祖父の辺泥五郎氏がセントルイス博覧会開催中に，アメリカの三姉妹から習ったという，三つ針の編み物を子供時代に教えてもらったことを記憶しておられた。

男性が編み物をする姿は，編み物が女性の仕事とされるジェンダー観からは奇異に映るかもしれない。アイヌ社会においても，ジェンダーによる男女の労働の区分は存在した。しかし，セントルイス博覧会に参加した辺泥五郎氏にとっては，新たな技術の習得においても，西欧社会や日本社会のジェンダー観によって規定された技術の領域が，自らの技術領域を規定することはなかったのだろう。「日本人」として生きる事を余儀なくされる状況の下で，キリスト教を通して西欧世界に触れる一方で，アイヌとしての出自を忘れる事のなかった辺泥五郎氏は，三つの世界の境界を自由に横断して生きた人物だったといえるだろう(チカップ　二〇〇五：一三八)。そのような人物だからこそ，新たな技術の習得においても，文化の境界に拘束された既存のジェンダー概念に捕らわれない，自由な生き方が出来たと考えられるだろう。こ

のようなわれわれの概念や領域を無化するようなさまざまな実践の越境性は，これまで見てきたセントルイス博覧会場における出来事を通しても知ることができるはずである。

ところでセントルイスのミズーリ歴史協会に残されている，二人の子供を含む野良着姿の六人のアイヌの人々をチセの前で写した写真には，その背景に電柱や垣根越しの建物が写されている。（＃1285-Ainu Group and Lodge）また，公式図録に収められたアイヌの集合写真にも電柱が写されている。（Reid 1904; 281, ＃20274-Ainu Group and Lodge）しかし，セントルイス公共図書館に保存された同じ写真からは，在ったはずの電柱や背景が消し去られている。（Beals 1-14, Ainu home and people）これらの写真は，セントルイス博覧会当時には人々を中心として（Ainu Group）共存可能だった科学と諸文化が，その後になって分離され，純化された文化が純粋なモノ（Ainu home）として表象される一方で，その中から科学技術のような普遍的要素が排除されていったことを示している。セントルイス博覧会当時には，文化そのものが相対的に独立したものとして理解されなかったと同様に，多くの人々にとって，科学のような普遍的な領域と文化のような個別で特殊な領域が非対称的に分離されることなく，互いに翻訳と増殖を繰り返し，共存することが当然だと考えられていたのだ。

これまで述べてきたように，セントルイス博覧会では，近代の展示装置としてさまざまな事物を分類し，配置し，説明することで近代社会の在り方を示す一方で，科学・自然と文化，西洋や非西洋の諸文化が完全に分離され純化されることなく，さまざまな時空間で自由に混交していたといえるだろう。しかし，先に明らかにしたように，アイヌの展示が行われた日英博覧会が開催された一九一〇年頃には，科学と文化が異なった領域へと分離され，文化そのものも複数形で相対的な小文字の文化（cultures）へと純化されてゆく。（注 14）それは，多様な接触領域における実践を可能にするハイブリッドなネットワークが禁止され，先に述べた翻訳と増殖の「実験室」が急速に失われてゆく過程でもあったといえるだろう。（宮武　二〇〇〇，Latour 1993）

博覧会におけるアイヌの人々の展示は，大正のはじめまでおこなわれた事が知られている。金田一京助と春彦の対談では，明治末の博覧会について次のように語られている。

「(金田一京助) そうそう，明治四十五年，久しぶりにわたしはアイヌに会うことが出来たんだ。というのは，その年に政府が上野で拓殖博覧会というのをやって，樺太，北海道のアイヌばかりじゃない，ギリヤークまで，上野の不忍の池の池之端で，故郷の生活をさせて，博覧会のお客さんに，それを見せたわけだ。」(金田一京助・金田一春彦，一九六二；一〇三) (注 15)

この翌年の一九一三年 (大正二年) にも，大阪天王寺で開催された明治記念拓殖博覧会では，北海道アイヌや樺太アイヌの展示が行われていた。これらの「故郷の生活をさせて，博覧会のお客さんに，それを見せた」展示で，アイヌの人々は他の人々との交流を制限され一方的なまなざしの対象でしかなかったが，日本の著名なアイヌ研究者がそれに違和感を感じることはない。セントルイス博覧会のように，日本の博覧会がアイヌの人々にとって境界を自由に横断するハイブリッドな実践とアイデンティティの「実験室」となることはなかったのだ。

この研究の一部は，学術振興会・科学研究費補助金・基盤B (海外)「アジアにおける博覧会の研究」の助成を受けて行われたものである。また，近森聖美氏からは，辺泥五郎氏の多くの遺品を拝見し，貴重な話を伺うことが出来た事を報告し感謝したい。これまでのアイヌ研究の過程で，多くの研究者がアイヌの人々を単なる調査対象として，その知識と資財を簒奪してきたことは事実だろう。このような非対称的な過去の関係を銘記しながら，本研究が近森氏の祖父と，アイヌ民族の近代史に僅かでも付け加えることがあれば幸いである。

注

(注 1) 本稿では，国民国家日本の国民としての日本人と，エスニック (民族) 集団として

の日本人を区別するため，前者を「日本人」，後者を日本人と表記する。

（注２）日本が参加した万国博覧会の研究としては，吉田らによる幅広い実証的な研究が挙げられる。（吉田　一九七〇，一九七五，一九八六）それらは，万国博覧会を産業資本主義と機械文明の祝祭と捉え，博覧会における，さまざまな技術や工芸，あるいは建築物などを通して，世紀末の西欧世界と，来るべき二〇世紀の新しい時代を理解しようとした点では，ベネディクトと同じ人類学からの博覧会研究の流れに属する。しかし，初期の万国博覧会のモノを中心とした実証的・具体的な研究は，その後のポスト・コロニアリズム研究と同期した文化研究や，政治的・イデオロギー的側面に注目した批判的研究へと対象をシフトしてゆく。（Hinsley 1991, Rydell 1984, 1992，吉見　一九九二，Takada 1992, Breitbart 1997）

（注３）日露戦争と同時期に開催されたセントルイス博覧会に，日本は多額の経費を費やして参加するだけでなく，各国に先駆けて開催準備を完了した。その一方で，日本の交戦国であったロシアは，戦争を理由に参加を取りやめている。（伊藤　二〇〇三）

（注４）一八七六年のフィラデルフィア博覧会には，米国の万国博として初めて，シャンティービルと呼ばれる約一マイルの娯楽ゾーンが設けられた。（Benedikt 1983; 52）

（注５）当時の人類学における科学とアマチュアリズムの二面性については，一九〇四年の『東京人類学雑誌』に掲載された，「學の展覧會か物の展覧會か」にも見られる。東京帝国大学で行われた「人類学展示」について，前田不二三は次のように書いている。

「學の展覧會か物の展覧会會といふ問は，言ひ換へれば學術の展覧會であるか，學術の資料たる物そのものの展覧會であるかという事である。此事は問ふまでもなく知れきっているやうであるが，更に一考して見ると少しわからなくなって来る。……既に表題が人類學展覧會となって居るから，無論學の展覧會であると斯く云はるる人があるかも知らぬが，……表題は然うなって居つても，或は物の展覧會かも知らない。」（前田　一九〇四）

また坪井正五郎は，一八八九年のパリ万国博覧会を見学し，強い感銘を受けたことを「パリー通信」で報告している。（坪井　一八八九）このパリ万博には独立した人類学展示はなく，人類学関連の展示としては，世界各地の住居を「人間の住居の歴史」と題して展示したものや，アルジェリアやセネガルなどの植民地の住居を再現し住民を生活させて展示した植民地展示などのほかに，カイロ通りと名付けられた中東の娯楽ゾーンなどがあった。（L'EXPOSITION de PARIS de 1889）坪井は，一九〇三年の第五回内国博覧会の際に，外国の博覧会における「人類学の参考」として「一館に収容せずして各国人種並に建築を会場内の各箇処に散在せしめ恰も各府県の売店の如くせば，極めて趣味あり又有益のものとなり」と書いているが，これはパリ万博の植民地展示と余興が混在した展示形態を，人類学展示のモデルとして描いていたためだろう。（松田　二〇〇三：一三七）

また，人類学の黎明期に，「江戸の本草学をモデルとした曼陀羅に向かう知の体系と，

記述実験に向かう野の学としての民俗誌学の両者を射程に収め」た山中共古なども，モノそのものへの関心と，知の体系による系統的理解という二面性を，未分化なまま併せ持っていた。(山口　一九九五：五二四－五三七)

(注６) 人類学責任者となったマクギーは，シカゴ博覧会の人類学展示でプットナムの主任助手として働いた経験を持つボアズに対しても，実験室展示に関する協力を依頼している。(Rydell 1984: 164, Hinsley 1991)

(注７) 現代の米国人類学史では，スターはほとんど語られることのない，傍流の人類学者である。それは，スターの理論的立場が終生十九世紀後半の進化主義から脱することが出来ず，学問的な成果をあげることが出来なかったからだとされる。また，スターが一九二三年まで在職したシカゴ大学人類学部は，多くの著名な研究者を輩出したボアズのコロンビア大学と対照的に，学部生の教育に力を入れて専門的研究者を育てることはなかった。

パターソンは，一九一〇年から一九二〇年代の米国における近代人類学成立の条件として，職能者集団としての学会の成立と，専門研究者としての大学院生の養成が重要だったとしているが，スターはその何れにも関心を払わなかったと言ってよいだろう。(Patterson 2001; 50-51) また，現在のスターに対する低い評価は，広い知的好奇心をもとに，幅広い分野横断的な研究を重視した初期人類学に対する，科学的に純化されたボアズの文化人類学，言い換えれば人類学における文化相対主義というパラダイム転換によって勝利者となった文化人類学からの史観が反映されている。

スター退職後の一九二三年に，ボアズの弟子だったフェイ・クーパー・コールが，自然史博物館からシカゴ大学人類学部へスターの後任として赴任する。さらに一九二五年になると，言語人類学研究で大きな成果を挙げるエドワード・サピアが準教授として赴任するが，この時期になって初めて，文化人類学史におけるシカゴ大学の歴史がはじまったと言ってよいだろう。(Darnell 1998, Stocking 1968) ちなみに，独自の唯物論的人類学をミシガン大学を中心に展開し，マーヴィン・ハリス，マーシャル・サーリンズなどに大きな影響を与えたレスリー・ホワイトが，一八九七年以来となる人類学博士号をシカゴ大学で授与されたのも，スター退職後の一九二七年だった。

山口もまた，スターについて次のように述べている。

「ペンシルバニア州のラファイエット校で地質学の博士号を取得した後，アイオワのコウ大学で生物学の教鞭をとった。しかし間もなく当時，姿を現していた人類学という新しい学問に惹かれ，アイオワ州のインディアンの調査を始めた。彼の研究が認められ，明治二五年(一八九二年)，新設のシカゴ大学で人類学の開講を依頼された。スターは人類学の理論には寄与するところは無かったが，教師としては大変有能であった。」(山口　一九九五；五四七-五五五)

(注８)『値段史年表・明治・大正・昭和』によれば，明治二十五年（一八九二年）の標準的な白米十キロの値段が六十八銭，明治三十年が一円十二銭，明治三十五年が一円十

九銭，明治四十年が一円五十六銭となっている。また，明治四十年の日雇い労働者の日当は四十九銭，高等文官試験に合格した高等官の初任給が月額五十円となっている。これらのことから，渡米したアイヌが約束された一日一円という日当や，セントルイスから持ち帰った千円近くの現金は，当時の物価水準からしても，非常に大きな金額だったといえるだろう。

(注9) アイヌを対象にした独自の近代教育制度は，「北海道旧土人保護法」(一八九九年)による小学校の設置と，「旧土人児童教育規定」(一九〇一年)によって成立した。それらによって，アイヌ児童の就学率，出席率は急速に上昇し，一九〇〇年頃にはどちらも三〇%程度だったものが，一九一〇年代には九〇%を超えた。(小川　一九九七：七－十三) また別の資料によれば，一九〇九年までに「旧土人小学校」が二十一校開校され，一九〇一年には四五%弱だった就学率が，一九一六年には九四%弱に上昇した。(海保　一九九二：三五)

(注10) セントルイス万国博覧会については，一九九六年に「アイヌ太平洋を渡る」と題するドキュメンタリーがNHK教育テレビで放送され，辺泥五郎氏の遺品の一部について紹介されている。

(注11) 在米中の社会主義者片山潜は，一九〇四年の『社会主義』に「聖路易博覧會」という記事を寄稿し，「博覧會は一般不景氣にして，皆失敗に帰し，藝者踊りも面はしからず，三人の藝者は滋養分欠乏やら，時候あたり，又は電車に布かれて死亡し，一二度ストライキを為して賃金の増加を請求せしも意の如くならず，半数は帰国し，残る半数は一二週間の後に断はれたるに，之を当て込みに引き受けんとて醜業策を講ずるものもあり彼等の前途は甚だ危険に迫れり」と書いている。(片山　一九〇四，八)

多くの米国人から賞賛される一方，芸者には，三名の原因不明の死者や，一人の行方不明者が出るなどの事故が多発し，芸者は「呪われている」という新聞記事が出るほどだった。さらに，一四人が米国滞在の嘆願書を書き一七人が帰国を拒否している。

この問題については，手島臨時博覧会事務官長，在米公使，外務次官珍田捨巳，農商務次官和田彦次郎の間での書簡が外交史料館に残されているが，手島からの電報には次のように書かれている。

「訳文　都踊芸人残リ十七人去二十四日解雇セラレタルニヨリ帰国ヲ命シタルモ代理人ヲ雇入レ人権ノ自由ヲ主張シ帰国ヲ肯ンセス却テ処々ニ逃亡ノ計画ヲ為スニ付遂ニ当国政府ニ交渉シ移民法ノ制裁ニ依リ送還スヘク請求中ニシテ目下当地移民官ノ命令ニヨリ拘留中ナリ」(外交史料館「米国合衆国ミゾラ州セントルイス市ニ於テ万国博覧会開設一件」明治三十七年十月十五日資料)

このような状況の下では，一部の参加者に博覧会後の在米継続許可を出すことは困難だったと考えられる。

(注12) セントルイス博覧会で唯一の女性公式写真家であり，多くの写真を残しているビールズ (Jessie Tarbox Beals，一八七〇～一九四二) は，米国における最初の女性

フォト・ジャーナリストの一人として知られている。博覧会の翌年，ニューヨークのグリニッジ・ビレッジに移り住んだビールズは，ボヘミアンな生活スタイルで，詩を書き，スラムの子供たちのドキュメンタリー・スタイルの写真集を出版した。(Rosenblum 1994) セントルイス博覧会で撮られた生活風景や，幼いきんやきくなどの子供を被写体にした優れたポートレイトは，その萌芽だったとも言えるだろう。セントルイス博覧会でビールズにより撮影された写真の多くが，現在はセントルイス歴史学博物館やセントルイス公共図書館，さらにニューヨークのアメリカ自然史博物館などに残されている。(Mathe 1998)

(注 13) この写真には Ainu and Patagonian women became acquainted というキャプションが付けられている。この「パタゴニア婦人」は，アルゼンチン南部から来ていたテウェルチェ (Tehuelche) の一人であると考えられる。

(注 14) それまでの，文明 (Civilization) とほとんど同義語だった単数形で大文字の文化 (Culture) に対して，複数形で相対主義的な小文字の文化 (cultures) が米国で使われるようになったのも，日英博覧会と同時期の一九一一年以降である。(Stocking 1968; 203)

(注 15) 明治記念拓殖博覧会では，展示された「樺太オタサムアイヌ」を金田一京助が訪問し，アイヌ語の聞き取り調査を行っている。(長谷川　二〇〇五：八六) ここでも，アイヌの人々は調査の対象でしかなかった。

参考文献

伊藤真実子　二〇〇三「一九〇四年セントルイス万国博覧会と日露戦時外交」『史学雑誌』第一一二編　第九号，六六－八六頁

大井浩二　一九九三『ホワイト・シティの幻影 ── シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力』研究社出版

小川正人　一九九七『近代アイヌ教育制度史研究』北海道大学図書刊行会

海保洋子　一九九二『近代北方史 ── アイヌ民族と女性と』三一書房

春日直樹　二〇〇二「物語ること」森明子編『歴史叙述の現在 ── 歴史学と人類学の対話』人文書院

春日直樹　二〇〇四「人類学の歴史研究の再検討；いまなぜ歴史か ── 序にかえて ──」『文化人類学』六九／三，三七三－三八五頁

片山潜　一九〇四「聖路易博覧会 ── フェヤー，ジャパン」『社会主義』第八年　第一四号，八－十頁

片山潜　一九六〇 (一九〇四)「米国だより」『片山潜著作集　第二巻』河出書房新社

北田暁大　二〇〇一「歴史の政治学」吉見俊哉編『カルチュラル・スタディーズ』講談社選書メチエ

金城勇　二〇〇五「学術人類館事件と沖縄 ── 差別と同化の歴史 ──」『人類館 ── 封印された扉』アットワークス
ギンズブルグ・カルロ　一九九〇「手がかり　モレルリ，フロイト，シャーロック・ホームズ」エーコ・ウンベルト／トマス・A・シービオク編　小池滋監訳『三人の記号　デュパン，ホームズ，パース』東京図書
グリーンブラット，スティーブン　一九九二　高田茂樹訳『ルネサンスの自己成型』みすず書房
栗本英世・井野瀬久美恵編　一九九九『植民地経験・人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院
高榮蘭　二〇〇〇「『テキサス』をめぐる言説圏 ── 島崎藤村『破戒』と膨張論の系譜」金子明雄他編『ディスクールの帝国 ── 明治三〇年代の文化研究』新曜社
佐々木利和　一九九七ａ「東京国立博物館のアイヌ民族資料（上）」『北海道道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第三号（一九九七年三月）
佐々木利和　一九九七ｂ「東京国立博物館のアイヌ民族資料（下）」『北海道道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』第四号（一九九七年三月）
柴田常恵　一九〇四「セントルイ博覧会の人類学部」『東京人類学会雑誌』第一九巻　第二一六号　二三九－二四一頁
チカップ美恵子　二〇〇五『森と大地の言い伝え』北海道新聞社
紋別市史編さん委員会　一九七九　『新紋別市史・上巻』紋別市役所
坪井正五郎　一八八九「パリー通信」『東京人類学会雑誌』第四巻　第四三号　五一六－五二四頁
長谷川由希　二〇〇五「アイヌ民族と植民地展示 ── 一九〇三年～一九一三年の博覧会から」『人類館 ── 封印された扉』アットワークス
中沢新一　二〇〇四『対称性人類学』講談社メチエ
バチェラー・ジョン　一九六五　仁多見巌訳『ジョン・バチェラーの手紙』山本書店
バチラー，ジョン　一九二八『ジョン・バチラー自叙伝：我が記憶をたどりて』文録社
バチラー・ジョン　一九九三　仁多見巌・飯田洋右訳『わが人生の軌跡 ── ステップス・バイ・ザ・ウェイ』北海道出版企画センター
バチラー・ジョン　一九九五　安田一郎訳『アイヌの伝承と民俗』青土社
藤本英夫　二〇〇二『知里幸恵　一七歳のウエペケレ』草風館
前田不二三　一九〇四　「學の展覧會か物の展覧會か」『東京人類学会雑誌』第一九巻　第二一九号　三四二－三四六頁
ポパー，カール　一九六一　久野収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』中央公論新社
松田京子　一九九六　「パビリオン学術人類館 ── 世紀転換期における『他者』表象をめぐる知」『日本学報』第一五号，四七－六九頁，大阪大学文学部日本学研究室
三浦泰之　二〇〇一「ウイーン万国博覧会と開拓使・北海道」『北海道開拓記念館研究紀要』

第二九号，一七七－二〇六頁（二〇〇一年三月）
宮武公夫　二〇〇〇　『テクノロジーの人類学』岩波書店
宮武公夫　二〇〇二　「人類学とオリンピック――アイヌと1904年セントルイス・オリンピック大会――」『北海道大学文学研究科紀要』第一〇六号（二〇〇二年十二月）一－二十二頁
宮武公夫　二〇〇五　「黄色い仮面のオイディプス――アイヌと日英博覧会――」『北海道大学文学研究科紀要』第一一五号（二〇〇五年二月）二一－五八頁
村上久吉　一九四二　『あいぬ人物傳』平凡社
山口昌男　一九九五『『敗者』の精神史』岩波書店
吉田光邦　一九七〇『万国博覧会：技術文明史的に』日本放送出版協会
吉田光邦　編　一九八五『図説万国博覧会史：1851－1942』思文閣出版
吉田光邦　編　一九八六『万国博覧会の研究』思文閣出版
吉見俊哉　一九八七『都市のドラマトゥルギー――東京・盛り場の社会史』弘文堂
吉見俊哉　一九九二『博覧会の政治学――まなざしの近代』中公新書
ライト前川眞二郎　二〇〇三『ライト前川眞二郎著作集　日誌（昭和十六年～二十三年）』フランシス佐藤眞
Appelbaum, Stanley 1980 *The Chicago World's Fair of 1893: A Photographic Record,* Dover Publications
Benedict, Burton 1983 *The Anthropology of World's Fair; San Francisco's Panama Pacific International Exposition of 1915,* Scolar Press
Bennitt, Mark, ed., 1905 *History of the Louisiana Purchase Exposition,* Universal Exposition Publishing Co.
Boas Franz, 1974 Stocking, G.W.ed., *A Franz Boas Reader; The Shaping of American Anthropology, 1883-1911,* University of Chicago Press
Breitbart, Eric 1997 *A World on Display: Photographs From the St.Louis World's Fair 1904,* University of New Mexico Press
Browman, David L., 2002 'The Peabody Museum, Frederic W.Putnum, and the Rise of U.S.Anthropology, 1866-1903' *American Anthropologist,* 104(2)508-519
Christ, Carol 1996 'Japan's Seven Acres; Politics and Aesthetics at the 1904 Louisiana Purchase Exposition' *Gateway Heritage,* Vol.17 No.2 Fall, pp.2-15, Missouri Historical Society
Christ, Carol Ann 2000 'The Sole Guardians of the Art Inheritance of Asia: Japan and China at the 1904 St.Louis World's Fair'*Position,* Vol.8: 3 pp.675-709
Clevenger, Martha R., 1996 *Incredibly Grand; Diaries and Letters from the 1904 World's Fair,* Missouri Historical Society Press
Clifford, James 1997 *Routes; Travel and Translation in the Late Twentieth Century,*

Harvard University Press

Darnell, Regna 1998 *And along came Boas; Continuity and Revolution in Americanist Anthropology,* John Benjamins Publishing Company

Dean, David 2002 *Beading in the Native American Tradition,* Interweave Press

Dye, James Wayne, 1970 'Denton J. Snider's Interpretation of Hegel'*The Modern Schoolman,* XL VII(jan.1970)pp.153-167

Francis, David R., 1913 *The Universal Exposition of 1904,* Louisiana Purchase Exposition Co.

Fox. T. J., & Sneddeker, D. R. 1997 *From the Palaces to the Pike,* Missouri Historial Society

Gross, Paul R., & Levitt, Norman 1994 *Higher Superstition; The Academic Left and It's Quarrels with Science,* The Johns Hopkins University Press

Haraway, Donna 1988 'Situated Knowledges; the Science Question in Feminism and the Privilege of Partial Perspective'*Feminist Studies,* 14, no.3 (Fall 1988)pp.575-599

Hinsley, Curtis M., 1991 'The World as Marketplace: Commodification of the Exotic at the World's Columbian Exposition, Chicago, 1893'in Karp and Lavine eds., *Exhibiting Cultures: The Poetics and Politics of Museum Display,* Smithonian Institution Press

Hotta-Lister, Ayako 1999 *The Japan-British Exhibition of 1910; Gateway to the Island Empire of the East,* Japan Library

Ingold, Tim 1996 '1990 Debate, Human World's are Culturally Constructed' *Key Debates in Anthropology,* Routledge

Kotani, Yoshinobu 1999 'Ainu Collections in North America: Documentation Projects and the Frederick Starr Collections' Fitzhugh and Dubreuil., eds., *Spirit of Northern People,* Smithonian Institution

Kreiner, Josef 1993 'European Images of the Ainu and Ainu Studies in Europe' Kreiner, J. ed., *European Studies on Ainu Language and Culture,* Indicium-Verlag

Latour, Bruno 1987 *Science in Action; How to follow scientists and engineers through society,* Harvard University Press

Latour, Bruno 1993 *We Have Never Been Modern,* Harvard University Press

Lyman, B. Smith, 1875 Letter to Mr. Kuroda on Dec.5, 1875 (北海道大学北方資料室ライマン書簡所収)

Mathe, Barbara 1998 'Kaleidoscopic Classifications: Redefining Information in a World Cultural Context' *IFLANET* code number:109-145(WS)-E, (64th IFLA General Conference Aug.16-21)

Mucciogrosso, Robert 1993 *Celebrationg the New World; Chicago's Columbian Exposition of 1893,* Ivan R. Dee

Patterson, Thomas C., 2001 *Social History of Anthropology in the United States,* Berg

Reid, R. A., Rau, W.H., 1904 *The Greatest of Expositions Completely Illustrated: Official Publication,* Official Photographic Company of the Louisiana Purchase Exposition

Rosenblum, Naomi 1994 *A History of Woman Photographers,* Abbeville Press Publishers

Rydell, R.W., 1984 *All the World's a Fair; Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916,* University of Chicago Press

Rydell, R.W., 1992 *The Book of the Fairs; Materials about World's Fairs, 1834-1916, in the Smithonian Institution Libraries,* American Library Associatin

Stocking, G.W., 1968 *Race, Culture, and Evolution: Essays in the History of Anthropology,* University of Chicago Press

Starr, Frederick 1904 *The Ainu Group at the Saint Louis Exposition,* The Open Court Publishing Company, Chicago

Stevens, W.B., 1904 *The Forest City-1904,* Thompson Publishing Co.(originally appeared as weekly serial from April 14 through November 3, 1904)

Takada, Hiroko 1992 *Images of A Modern Nation: Meiji Japan and the Expositions, 1903-1904,* Senior seminar paper, publisher unknown (Missouri Historical Society library)

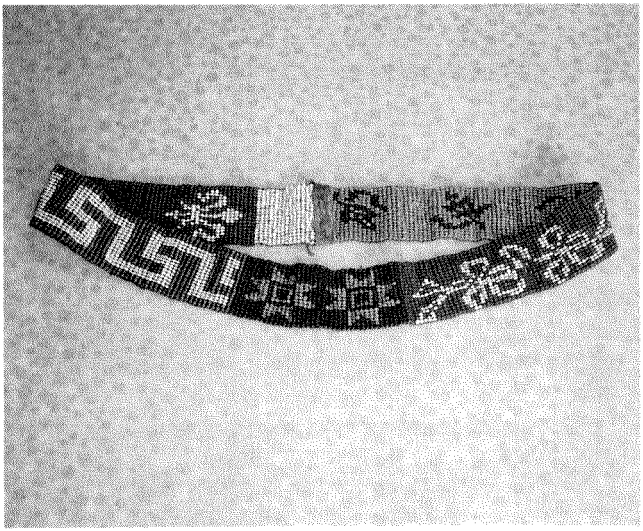
Truman, Ben C., 1893 *History of the World's Fair,* Mammoth Publishing Co.

VanStone, James W., 1993 'The Ainu Group at Louisiana Purchase Exposition, 1904' *Arctic Anthropology,* Vol.30, No.2, pp.77-91

セントルイス博覧会におけるアイヌの人々。左から，大沢弥蔵(ヤゾウ)，平村さんとくぬ(サントゥクノ)，辺泥五郎，大沢シラケ，平村しゅくらもてき(シュクラトク)，平村クトロゲ，平村サンケア(サンゲア)，前列の左側が平村キク，右側が平村きんである。ほとんど同じ写真が辺泥五郎氏の写真帖に含まれている。(Special Collections, St. Louis Public Library)

閉会前に撮られた，日本博覧会関係者の記念写真。前列に近い左側に大沢シラケ，弥蔵，辺泥五郎の姿を見ることができる。(近森聖美氏蔵)

テウェルチェ女性と交流するさんとくぬ（サントゥクノ）（Special Collections, St.Louis Public Library）



辺泥五郎氏の遺品に含まれていた。シャイアンのものと思われるビーズのブレスレット（近森聖美氏蔵）

Ainu Group and Lodge (Missouri Historical Society)

Ainu home and People (Special Collections, St. Louis Public Library)